
DEATH13

DEATH13

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEATH 13

【Nコード】

N4757X

【作者名】

DEATH 13

【あらすじ】

ある日、僕は自分で自分を吊しました……

引き籠もりだった主人公は、この世界に耐えきれず自殺しました。

そして、目覚めると……

この作品を読んで何か感じていただけると嬉しいです。

他のサイトでも掲載しています。

4話ㄱグロテスクな表現が含まれています。

この作品は犯罪、暴力等を助長するものではありません。

全て架空の物語です。

御理解の上、お読み下さい。

更新遅いですが精一杯、頑張りますので宜しくお願いします。

DEATH 0 『Death』

僕には、夢や希望がない。

お金も、彼女も、友達も、地位も、名誉も……

何も……無い。

あるのは、この醜い容姿と汚れた心

でも、それでいい。

これが僕だから……

暗い部屋に一人……

いつもと何も変わらない風景

そして、いつも通り「死」が僕の頭を支配する。

こんな僕が、こうして現在を生きている。

この生命が、あとどれくらい残されているのか……

今日、明日、一カ月後、一年後……？

もう既に死神に睨まれているかもしれない。

今、まさにその大鎌を僕に振り翳そうとしているかもしれない。

この世界に平等なんて言葉は存在しない。

全てに於いて不平等。

否、一つだけ誰にでも訪れる平等が存在する。

死だ……。

生きる事がこんなにも息苦しく窮屈だとは……。

この人生は、予め何者かが書き綴った物語を僕はただ演じさせられているだけなのだろうか？

僕は操られているのだろうか？

蠟燭に火を点ける。

何気無いこの行動も僕自身の意思ではなく、何者かが僕を操っているだけなのか？

僕は用意された物語の一人形に過ぎないのだろうか……

努力しても報われない。

始めから全て決められているから……？

この世界に存在する罪人は、物語の悪として選ばれた人間が、ただ操られ罪を犯しているだけなのか？

生の意味……

そして

死の意味……

僕は今まで何度も自殺を考えた。

対人恐怖による苦痛で誰も信用出来なくなったからだ。

嘘、偽り、裏切り……

人間が怖い。

とても怖い。

でも、僕もその人間……

そう思う度に発狂する。

無駄な知識を身に付けたが故に今日もまたこの世界の何処かで争いが始まる。

生命を奪い、生命を繋ぐ……

本当に残酷な下等生物だ。

そう、僕もまたその残酷な下等生物の一人。

本当に愚かな生物。

有名、無名に拘らず同じ人間。

人間……生……死……。

何も変わらない筈だが……

僕にあるこの苦しみは、僕にしか解らない。

実際にその人間と全く同じ状況にならない限り、相手の本当の気持ちなんて解る筈もないが、誰も僕の事を理解しようもしない。

僕には存在理由すら無い。

誰からも必要とされない。

もう耐えられない……

このままずっと死神に怯えて生きるくらいなら、いつその事この生命を奴に奪われてしまう前に……

……僕は自分で自分を吊しました。

あれからどれだけの時間が経過したのだろう……

それを知る術は、何処にも無い。

僕は過去の記憶を辿ってみた。

……

……

……

そして答えを見付けた。

『僕はもう消えてしまったんだ……』

少し寂しい気持ちになった。

辺りを見渡してみるが、そこは何も無い空間

人、物、音、色……

全てが無だ。

とても不思議な場所

『此処にあるのは、僕の心だけ？』

その時、僕は何か違和感を感じた。

『まだ少しだけ体の感覚が残っている』

試しに自分の手を少し動かしてみる。

『動いた……』

そして、恐る恐るその手の方に視線を向けた。

僕は言葉を失った。

……

『何故だ……』

白骨化した僕の手がカタカタと音を立てて震えている。

その指の隙間から足元に転がる鈍く光る何かが僅かに見えた。

僕はそれに視線を移した。

一瞬、思わず眼を逸らしてしまった。

それは……

身の丈程ある大鎌が僕を鋭く睨んでいたのだ。

ようやく今、自分の置かれている立場が理解出来た。

僕は生まれ変わった。

死神に……。

DEATH ? 『The Fool』

この僕が、あの忌まわしい死神に……

これから僕が誰かの生命を奪わないといけないというのか？

誰かが僕の存在に怯え、恐怖する……

僕が他人の生命を……

そんな事……僕には絶対出来ない。

絶対に……

……

……

……

この現実から逃れる様に視覚を閉じた。

生前、何時も僕に付き纏っていた恐怖と絶望感……

それが今の僕は怯える事など何も無く、痛みさえ感じない。

あれだけ怯えていた死も死神の恐怖も今の僕にはもう関係ない。

こんな形での長く続いた苦痛から、いとも容易く解放されるとは嘘の様だ。

僕は大声で笑った。

人間だった頃、大声で笑った事など一度もなかった。

他人からすれば、僕の笑い方は下手くそだろう。

でも僕は、気が済むまで思いきり笑った。

……

『僕が大声で笑った……』

そして、気付いた。

今まで全く笑った事のなかった僕が……笑った……。

あの頃より今の方が、ずっと幸せだと感じていた。

僕は死神の存在を誤解していたのかもしれない。

ただ無差別に人間の生命を奪うだけの冷酷な存在だと思っていた、
今までは……。

きっと死神は苦しんでいた僕を見て、この幸福な時間を与えてくれようとしたのだろう。

今の僕には、そう思えてならなかった。

『僕の一番の理解者は死神だったのか……』

死神が向かうその先には、必ず何かがある筈だ。

僕が死神に選ばれた事にも何か理由があるのかもしれない。

僕は、その答えを見付ける為に死神というこの現実を受け入れ、
っと視覚を開いた。

すると、さっきまで居た筈の無機質な空間から見慣れた場所へと変わっていた。

『此処は……僕の部屋だ』

普通なら驚く所だが、あんな事があった後の僕は至って冷静だった。

雑然とした部屋

僕は机に置かれた砂時計をただ見詰めていた。

その時、

『ニャー……ミャー……』

外から猫の鳴き声が聞こえてきた。

『仔猫か?』

何を隠そう、僕は動物が好きだ。

その中でも特に好きなのが猫。

あの愛くるしい仕草は見ていて本当に癒される。

動物は人間と違い、僕を裏切らない。

僕は鳴き声を頼りに部屋を後にした。

聴覚をその鳴き声に集中させる。

.....

.....

.....

鳴き声が、だんだん近付いてくる。

そして、僕は自分の眼を疑った……

なんと、そこには僕の大好きな猫を虐めている愚者が居たのだ。

その仔猫は精一杯、声を出して抵抗しているが、愚者の耳には届かない。

愚者は容赦なく仔猫を痛め付けていた。

仔猫は傷付き、ぐったりと横たわっている。

.....

愚者が俺に気付き、俺を見るなり尻餅をつき、後退りしている。

俺は愚者をじっと見下ろしていた。

……

すると愚者は一目散に逃げた。

『さあ、狩りの始まりです』

俺は力強く言った。

逃げ惑う愚者を俺は少しずつ追い詰めてゆく……

ゆっくり……

ゆっくりと……

這いずりながら逃げる愚者を壁際まで追い詰めた。

壁を背にした愚者は俺を見上げ精一杯、命乞いをしているが、俺の聴覚には届かない。

『猫に鯉節……死神に猫……』

俺はそう言っていると愚者の喉元目掛け、大鎌を降り下ろした……

俺は傷付いた仔猫の下へ駆け寄った。

仔猫は辛うじてまだ息をしていた。

『もう大丈夫』

俺は身に纏った黒いローブで優しく仔猫を包んだ。

ふと振り返ると愚者がこちらを見て何かを言っている。

『ニャーニャーニャー』

……あの時、俺は愚者の声帯に細工を施していた。

『貴様は猫になったのだ……今日から死ぬまで一生その声で生き続けるがいい』

自分の言いたい事も、思っている事も相手には伝わらない。

この仔猫と同じ様に……

貴様の喉仏に仏など居なかった……

居たのは死神だ……。

あれから僕は、あの傷付いた仔猫を部屋に連れ帰った。

どこか僕に似ているこの仔猫を見捨てる事など出来なかったからだ。

僕は部屋に戻るなり、仔猫の傷の手当てをした。

『これでよし……と』

痛々しい傷口は、今は包帯で隠れている。

『君も孤独……そして、僕もまた孤独……』

傷付いた仔猫を優しく撫で

『似た者同士、これから仲良くやっていこう』

と僕が言うと

『ニャー』

と掠れた声で仔猫は答え、ざらついた舌で僕の指を舐めた。

……

僕はある事に気付いた。

『この仔猫の名前を決めないとな』

名前を考えてみた。

……×

……×

……×

なかなか良い名前が思い浮かばない。

そこで僕は部屋を見渡し、名前になりそうな素材を眼で探った。

……

……

……

『無いな……』

諦めかけていたその時、床に散らばったトランプに眼が止まった。

他のカードは全て顔を伏せていたが、一枚だけこちらに顔を見せているカードがあった。

『JOKER……か』

僕は仔猫に向かって

『今日から君の名前は、JOKERだよ』

と言った

気に入ってくれるといいけど……

十数日後十

JOKERは徐々に元気になっていった。

まだ、ぎこちないが走れるまでに回復していた。

『JOKER、こっちこっち』

僕は手招きをして呼んだ。

JOKERは一度こちらを見て、それから少ししてそっぽを向いて
何処かへ行ってしまった……。

『猫っていいな』

あの素っ気無さも僕にとっては堪らない。

死神になってしまった今でも……

やっぱり僕は猫が好きデス。

DEATH ? 『The Lovers』

過去の記憶……

人間だった頃の記憶……

ほとんど残っていない。

楽しかった事……

悲しかった事……

全く思い出せない。

僕と共存する、この胸の痛み……

激しく胸に突き刺さる痛みを今でも鮮明に覚えている。

何が原因でこの痛みがあるのかは、全く思い出せない。

とにかく激しい胸の痛みだけが残っている……

僕はベッドの上で天井の一点を見詰めながら、過去を思い出そうと
していた。

何気無く視線を横にやると、僕の隣で丸くなって気持ち良さそうに眠るJOKERが居た。

『君は悩みが無さそうでいいね』

と僕は言い、JOKERを起こさぬよう慎重に起き上がった。

気分転換する為に僕は部屋の扉を開け、外へ出た。

見上げると、そこには白一つ無い、澄み切った青が広がっている。

『この空も今日は、JOKERと同じで悩み無しか』

僕は目的も無く歩いた。

その途中、道端に咲いている色とりどりの小さな華達に眼を奪われた。

『近くにこんな綺麗な華が咲いていたとは……』

つい見過ごしてしまう、そんな小さな場所にも綺麗なものはきっとある。

僕は色違いの華を幾つか摘み、ローブの内に仕舞った。

『そろそろ、JOKER 起きたかな?』

僕は部屋に戻る為、来た道を引き返す。

……

……

……

部屋の前に着き、扉の取っ手に手を掛けた時、僕の嗅覚に何か訴えかけてくる香りが風に運ばれてやってきた。

『これは……死期の香り……』

僕は死期の香りに招かれ、気付けば、とある病院の入口に立っていた。

香りのする方へ歩を進めると、徐々にその香りが強くなってきた。

『此処か……』

病室に入ると、長く綺麗な黒髪の女性がこちらに背を向け、ベッドに横たわっていた。

僕は、その女性の顔をそっと覗き込んでみた。

……

その女性の顔を見た途端に僕は、とても複雑な心境になった……

『今日は、こんな物……要らないよね』

と僕は手にした大鎌を床に落とした……

そして僕は、その女性に対して深々と御辞儀をした。

今、僕の目の前に居る女性

僕が純真無垢だったあの頃に好きだった人……

僕の生涯で唯一、愛していた人……

僕の初恋の人……

この現実を呪い、変わり果てた君の姿を見て、僕は涙が零れ落ちるのと同時に君を強く抱き締めた。

その瞬間、眩い光が二人を包んだ。

病室に居た筈の二人が今、居るそこは僕の記憶の中にあるとても懐かしい場所だった。

僕が君を何時も眺めていた場所……

僕の思い出の場所……

僕の大切な場所……

僕の眼に映るその女性の体は、あの頃の元気な姿に戻っていた。

硝子の扉に僕が映る。

白骨化していた僕の体も昔の姿を取り戻していた。

『ずっと想いを伝えられず、何時も遠くから君だけを見ていたよ』

……

『今思えばあの時、君に僕の想いを伝えていれば……』

僕は呟いた。

すると女性は僕の耳元に寄り、一言こう言った。

『私も貴方の事をずっと想い続けていました……』

僕は膝から地面に崩れ落ちた。

『ごめんね……』

そこで僕は気を失った。

目覚めると僕と女性は病室に居た。

そして、二人の姿は元に戻っていた。

女性は何か言いたそうな表情で僕を見ている。

僕は女性の口元に聴覚を傾けた。

『嬉しかった……ありがとう……』

と弱々しく囁き、ゆっくりと瞼を下ろした。

僕からのせめてもの餞……

苦痛を与えず、静かに永久の眠りへと君を誘う。

『優しい死を君に……』

僕は仕舞っていた華を手向けた。

桜散る道を一人……帰路につく。

どれだけ嘆いても変わる事の無い現実……

この切ない想い……僕はずっと忘れない。

風に散りゆく無数の桜の花片は、僕の涙を優しく拭った……

本当に大切なものを忘れていませんか？

近くにある大切なものを見失っていませんか？

気付く事が出来なければ、もう二度と巡り逢う事は無いかもしれません。
せん。

気付いた頃には既に手遅れかもしれませんが……

今、この瞬間にも蝋燭の灯火は大きく揺らいでいるのですから……。

DEATH ? 『Wheel of Fortune』

笑顔……

仕草……

口調……

……

……

……

僕は、今は亡き彼女の事を想いながら、重い足取りで部屋に向かった。

部屋までの道程は気が遠くなる程、とても長く感じた……

……

……

……

ようやく部屋の前に辿り着いた。

部屋の扉が少し開いていたが、気に止めず中に入った。

吊された糸を切ったかの様に僕はベッドに倒れ込み、そのまま眠ってしまった……

……

彼女がJOKERと戯れている……

そんな夢を見ていた。

……

僕はある事に気付き現実へ戻った。

『JOKER』

僕は咄嗟に叫んだ。

この部屋に荒らされた形跡は無く、JOKERの居る気配は微塵も感じられない。

確か僕が部屋を出る前、JOKERはベッドで眠っていた。

だが、そこにJOKERの姿は無い……

僕は突如として不安に襲われた。

何の手掛かりも無いまま重い体を引きずり、JOKERを捜す為、部屋を出た。

『JOKER……JOKER……』

僕は不吉な予感を振り払う様に力の限り声が哽れるまでその名を叫び続けた。

色々な場所を必死に捜し回ったが、JOKERは何処にも居ない……

そして、最後に僕が行き着いた場所……

そこは鬱蒼とした森だった。

僕が森に足を踏み入れようとした時、雲一つ無かった空が突然曇り、ぽつぽつと雨が降ってきた。

雨が降る……

降り注ぐその雨は、僕の眼には赤く映っていた。

僕は森の中へ吸い込まれた。

生い茂った樹木が立ち並び、何処までも続いている……

僕は奥へ奥へと、ひたすら進んだ。

雨足が激しさを増してゆく。

進めど進めど全く風景は変わらない。

何も変わらない状況に僕は心が折れそうになっていた。

それでも、ただ黙々と前進した。

そんな状況の中、僕は心身共に限界に達していた。

しかし、ここで諦める訳にはいかない。

残った力を振り絞り、僕は前へ進んだ。

……

……

……

僕は一度、足を休めようと思い、立ち止まった時、大鎌を繋いでいた鎖が千切れ、僕の背から離れて落ちた。

……

水溜まりの大鎌を屈んで拾い上げると、僕は全身全霊を賭して叫んだ。

『JOKER……』

その声が森に木霊する。

すると、不思議な事にさっきまで何も無かったその場所に大樹が忽然と姿を現わしたのだ。

それを見て僕は呆然と立ち尽くしていた。

……

疲れ果てた体を少し休める為、大樹に凭れ掛かり、そのまま腕を組み俯いた。

その時、雷光が暗がりを照らした。

一瞬だったが大樹の傍らに何かがあったのが解った。

僕は、ゆっくりと近付いて見た。

……

僕の不吉な予感は的中していた……

そこには力尽きたJOKERの亡骸があった……

僕は跪き、JOKERを抱き抱えた。

小さなその体は、とても冷たく硬直していた。

『寂しい思いをさせてごめんね……』

止め処なく溢れ出る涙……

やりきれない気持ちで一杯だった。

『またしても僕の大切なものを……』

僕は震えながら叫んだ。

『僕が何か悪い事でもしたか？』

……

僕は空を仰ぎ、問い掛ける。

『何故……僕にこんな仕打ちを……？』

……

『僕が死神だからか……？』

……

僕は続けて問い掛けた。

『何か……答えろよ……』

……

虚しく雷鳴だけが響き渡っている。

『JOKER……』

僕の手にいるJOKERに向かって小さく呼び掛けた。

……

JOKERの亡骸を埋める為、大樹の前に両手で小さな穴を掘った。

その小さな穴にJOKERの亡骸を安置した。

JOKERをこれ以上、孤独にさせない様に僕が昔からずっと大切にし、何時も肌身離さず御守り代わりに持っていた一枚のコインをJOKERの体の上にそっと置いた。

僕はゆっくりと後ろから土を掛けた。

……

JOKERの体は土で覆われ、顔だけが出ている状態になった。

これで最後なのに、JOKERの顔は涙で霞んでいた。

『さよなら……』

僕はそう言っていると、早すぎる別れを惜しみながらJOKERの顔に土を掛けた。

そして、JOKERの名と今日の日付をナイフで大樹に刻んだ。

皮肉にもこの大樹がJOKERの墓標となった。

こうして僕はJOKERを手厚く葬った。

『またすぐに逢いに来るからね……』

僕は最後にそう言って立ち去った。

十数カ月後十

あれからの僕は哀しみに暮れ、何も手に付かない状態が続いていた。

また暗い部屋に一人……

悪夢に魘され続ける毎日……

まるで過去を繰り返している様だった。

彼女……

そして

J O K E R……

立て続けに大切なものを失ってしまった。

僕は自分を責め続けた……

†その日の深夜†

誰かが部屋の扉を叩いている……

僕はその音で夢から覚めた。

聴覚を澄ますと扉の音とは別に何か声が聞こえた。

『夜分遅くに失礼します……』

と言っている様だ。

『こんな時間に誰だ?』

僕は首を傾げ小さく言った。

ベッドに座ったままランプに火を灯し、立て掛けていた大鎌を手取る。

左手にランプ、右手に大鎌を持ち、扉へ向かう。

未だ扉を叩く音は鳴り止まない。

僕は扉の前に着き

『どなたですか?』

と扉越しに尋ねた。

すると、扉を叩いていた音は止み

『夜分遅くに失礼します……道に迷ってしまいまして……』

と聞こえてきた。

僕は少し怪しく思ったが、本当に困っている様な声だったので扉の鍵を外した。

そして扉を押し、僕は身構えた。

……

扉の向こうには、白装束を纏った見知らぬ青年が一人立っていた。

その青年は僕の姿を見ても全く動じていなかった。

『お久し振りです』

と青年が言う。

『貴方は……？』

と僕が問う。

……

青年は僕の問い掛けに答えなかった。

……

僅かな沈黙の後、

『中へどうぞ』

と僕が言うと、青年は律儀に御辞儀をして中へ入った。

青年の後ろ姿を見ると、十字架を象った大剣が背にあった。

僕は扉を閉め、鍵を掛けた。

『汚いですが、その椅子に腰を掛けて下さい』

と僕が言うと

『有り難う御座います』

と青年は、その椅子に腰を下ろした。

僕は机にランプを置き、その横の壁に大鎌を立て掛けた。

そして青年に温かい飲み物を用意した。

『お気になさらず』

と青年は僕に軽く礼をした。

僕が対の椅子に腰掛けると青年は

『信じてもらえないかもしれませんが、私の話を聞いて頂けますか？』

と心配そうに言ってきた。

『はい……』

突然の事で意味が解らなかったが、とりあえず青年の話を聞いてみる事にした。

……

青年は重い口を開き

『単刀直入に言います……私はJOKERです』

そう言うと青年は一枚のコインを僕に差し出した。

僕は驚愕した。

『それは……僕が大切にしていた……コイン……?』

……

もしあれが本当に僕の持っていたコインだとすれば、裏に大きな傷がある筈だ。

僕は慌ててそのコインを手に取り確かめてみた。

そのコインの裏にある大きな傷と僕の記憶のコインの大きな傷が一致した。

『間違いない……それは僕のコインだ』

青年は微笑みながら頷いた。

さっきまで気付かなかったが、青年の顔には大きな傷があった……

僕と青年の眼が合うと青年は語り始めた。

『あれから私の魂は行く宛も無く、この世で彷徨い続けていました

……

その時、何処からともなく声が聞こえてきたのです。

「お前には、まだやるべき事が残されている」と……

目覚めると既にこの姿で私は倒れていました。

そして、私に残された記憶の一部に貴方と此処の風景が映し出されたのです』

青年の話が終わると

『JOKER』

僕はそう言って思わず青年の頭を撫で回していた。

青年の髪は激しく乱れ、とても困惑している様だった。

……

『ごめんね……嬉しくて、つい……』

僕が謝ると

『いえ、私も貴方とこうしてまた再会する事が出来てとても嬉しいです』

JOKERは乱れた髪を整えながら言い、続けて

『遅くなりましたが、あの時は助けて頂き本当に感謝しています』

と言い、深々と御辞儀をした。

こんな形でJOKERと再会出来るとは夢にも思っていなかった。

礼を言うのは僕の方だ。

「JOKER、ありがとう」

僕は心の中で言った。

その時、たちまち心が晴れてゆく様だった。

話し終えたJOKERは、手持ちぶさたに部屋を見回していた。

『懐かしいです』

JOKERはそう言うのと飲み物に口を付けた。

……

JOKERは何か気付いた様に急に立ち上がり、カップを手にしたまま僕がランプを置いた机に向かった。

その時、部屋中に大きな音が響いた。

机に置いてあった一枚の色褪せた写真を見て、JOKERがカップを落としたのだ。

JOKERは、とても驚いている様だ。

『貴方が……』

JOKERは一言言って黙り込んだ。

……

『どうした？』

僕が尋ねると

『まさか、こんな事があるなんて……』

JOKERは俯き、言った。

……

JOKERは僕にその写真を渡し、そこに写った二人の内の一人を指差し

『これは……幼き頃の私です……』

『そして、その隣に居るのは貴方ですよね？』

JOKERは今にも泣き出しそうな表情で僕に迫る。

『解らない……』

僕が答えると、JOKERは僕に右手を差し出し、受け取る様に言ったがJOKERの掌には何も無い……

『何を受け取れば……』

『そのまま動かないで下さい……直ぐに終わりますので』

とJOKERは僕の言葉を遮り、僕の頭に右手をそっと乗せた。

……

僕の幼い頃の記憶が甦る。

『JOKERが……』

僕はその一言を言うのがやっとだった。

『思い出して頂けましたか？』

JOKERはそう言いながら僕の頭から右手を下ろした。

僕が頷くとJOKERは堪えていた涙を流し、僕に抱き付いてきた
……

JOKERは僕の弟だった……

幼い頃に死別した弟……

僕の目の前に居るJOKERは、写真の弟の面影があった。

そして、何よりの証拠がJOKERの右手にある特徴的な痣と写真の弟の右手の痣が見事に一致していた。

JOKERとの再会……

それは弟との再会でもあった。

DEATH ? 『Justice』

猫のJOKER……

弟……

僕にとってどちらも掛け替えのない大切な存在だった。

幼い頃、弟とはあまり遊べなかった。

猫のJOKERも同じだ。

奪われた時間をこれから少しずつ取り戻していこう……

晴れ渡る空の下、十字架の大剣を素振りして汗を流しているJOKERを僕は部屋の窓から頼杖を突いてのんびり見ていた。

JOKERはこちらに気付き、大きく手を振っている。

僕は外に出た。

強い陽射しに眼が眩む。

少しすると視覚が戻り、JOKERの前まで行き

『頑張ってるね』

と僕がJOKERの肩に手を乗せて言うと

『はい』

とJOKERは笑顔で答え、袖で汗を拭った。

『ちょっといいかな』

僕はそう言うとJOKERを木陰に連れて行った。

JOKERは丁寧に大剣を地面に寝かせてその横に座り、僕はJOKERの隣に座った。

そして僕はこれまでの経緯をJOKERに話した。

それを聞いたJOKERは

『そうだったんですね……』

と一言、感慨深く言った。

僕には気になっている事があった。

『聞きたい事があるんだけど』

僕が言うと

『何でしょう？』

とJOKERが言った。

『その十字架の大剣は？』

JOKERの横に寝かせてある大剣を覗き込みながら僕は言った。

『ああ、これですか』

とJOKERは言い、瞼を閉じて話し始めた。

『私が今の姿で倒れていた場所に黒い書物とこの大剣が落ちていました……』

私は黒い書物を手に取り、開きました……

そして読もうと文字に目を向けた時、突然文字が動き出し、ひとりでページが捲れ、無数の文字は浮かび上がり、やがてその文字が一つの塊になり、人物の姿となって私にその大剣の説明をしてくれました……

「その時の感情や想いなどにより大剣は変化し、肉体や物など目に見えるものは一切斬れず、人間の記憶や精神など目に見えないもののみ斬る事が出来る」

そう告げるとその人物の体は、ばらばらになり文字となって書物の中に戻ったのです……』

話し終わるとJOKERはゆっくりと瞼を開いた。

『話してくれて、ありがとう』

僕はそう言い、心の中で思っている事があった。

一見、何の変哲も無いあの大剣が不可思議な力を秘めていると……

気になる……

話を聞いた後の方が余計に気になっていた。

『今日は天気が良いし、少し散歩でもしない？』

僕が立ち上がりながら言うと

『はい』

とJOKERは元気よく立ち上がった。

僕はJOKERと散歩する事にした。

たまに吹く微風がとても心地好い。

蝶がひらひらと華に止まる。

その途中、僕は思い出した様に

『JOKERって名前、どう思ってる?』

僕が不安そうに聞くと

『とても気に入っています。良い名を命名して下さり有り難う御座います』

JOKERはそう言うのと深々と御辞儀をした。

『良かった……』

僕は溜め息混じりに洩らした。

『これからもJOKERって呼んでいいのかな?』

僕が聞くと

『勿論です』

とJOKERは即答した。

『私は貴方の事を何と御呼びすればよいでしょうか？』

JOKERが困った表情で聞いてきたので

『何なりと御好きな様に』

と僕は御辞儀しながらJOKERの口調を真似て言ってみた。

それを聞いたJOKERは笑っていた。

笑っているJOKERを見て僕も笑った。

二羽の小さな鳥が仲良く寄り添い、僕達の前を通り過ぎていった。

成長した弟と肩を並べて歩き、こうして同じ時間を過ごしている。

他者からすればこの光景は何気無い在り来りな日常に映るかもしれないが、僕にとっては本当に貴重な時間だ。

何時までもこの穏やかな時間が続いてゆく事を心から願っていた……

その時だった……

僕の視界に何か映り、眼を凝らすと紫の煙が手招きして僕を呼んでいた。

その煙を追うと公園に辿り着いた。

煙はこの公園のどこから出ている様だ。

煙を辿るとベンチの前で立っている一人の若者が居た。

紫の煙は、その若者から発していた。

若者はヘッドホンをして煙草を咥え、吹かしている。

ベンチには古びた服を着た老人が腕で目を隠し仰向けになって寝ていた。

若者はナイフを取り出し、ベンチで寝ている老人の心臓に何の躊躇もなくナイフを突き立てた。

老人は即死だろう……

『もう死んじまったのか？』

若者はそう言うのと老人の顔に唾を吐き付けた。

そして老人の骸をベンチから引きずり起こし、殴る蹴るの暴行を加えている。

老人は赤い涙を流している。

若者は弄ぶ様に老人をいたぶり続けている。

まるで、猫が鼠を捕らえた時の様に……

気の済んだ若者は老人の古びた服を漁り、金目な物を探している。

金品を持っていなかった老人に対し若者は

『この屑が』

と言い、吸いかけの煙草の火を老人の顔に押し付けた。

その後、若者は老人を突き飛ばし手を払いながら

『汚ねえな』

と吐き捨てた。

ベンチで寝る事があの老人にとっての楽しみだったかもしれない。

あの若者さえ居なければ、明日の今頃に老人はまたいつも通り、あのベンチで寝ていたかもしれない。

老人の楽しみと生命を同時に奪ったあの若者を僕は絶対に許さない。

僕のスイッチが切り替わった……

あのグロテスク……

倍返し……

否、それ以上の苦痛を与えてやる……

俺はグロテスクの背後に立ち、ヘッドホンを引き千切った。

グロテスクは振り返り

『何だ、お前？』

と馬鹿にした口調で言ってきた。

『死神だ』

俺が答えると

『趣味の悪いコスプレ野郎が』

とグロテスクは言い、俺を指差し腹を抱え笑っている。

『貴様、今 何を聴いていた？』

俺が聞くと

『デスメタルだ、何か文句あるか?』

グロテスクは怒りを露にして言った。

「デスメタル……」

俺が心で唱えると大鎌はエレキギターに形を変えた。

『何故、俺の大鎌が……』

視線を横にやると、JOKERの大剣もエレキギターに姿を変えていた。

俺は大声で笑い

『俺が本当のデスメタルを奏でてやろう……
そして貴様はヴォーカルだ』

グロテスクを指差し言い、続けて

『貴様のデスヴォイス、期待しているぞ……』

俺は含み笑いで言った。

『弱者を愚弄していますが、貴方も同じ弱者だという事に気付けないとは本当に哀れな方です……』

人間、皆……弱者なのです……

勘違いも甚だしいですね。

私達が身をもって教えてあげましょう』

JOKERはそう言う空に十字を切り、グロテスクに大剣を翳した。

すると、グロテスクは眼には見えない十字架に磔にされ、身動き一つ取れない状態になった。

あのグロテスクをもっとグロテスクに……

血祭りに上げてやる……

処刑台という名のステージで思う存分、暴れるがいい……

正直、俺は生まれてこの方、一度もギターなど触った記憶は無いが、思うがまま己の想いを込めて指を動かし、掻き鳴らすと

……

俺の指が勝手に動き、不気味な旋律を奏で始めた……

JOKERはギターを弾きながら、口で低音のベースと激しいドラムを同時に、そして忠実に再現している。

それを見た俺は

「流石、俺の弟よ……」

そう思っていた。

JOKERは全く曲を知らない筈だが、完璧に演奏していた。

兄弟の息の合った演奏

何処からかぞろぞろと寄って来た野次馬達が頭を激しく上下させ髪を振り乱している。

JOKERの回りには沢山の猫が寄って来ていた。

『よし、そろそろヴォーカルの出番だ』

俺はそう言うのと、グロテスクの右手に狙いを定めギターを振り被った。

グロテスクは首を激しく左右に振っている。

『違う、上下にだ……』

その時、ギターから大鎌へ瞬時に変わり、グロテスクの右手は弧を描き飛んだ。

グロテスクは絶叫した。

群衆はかなり盛り上がっている様だ。

ここら一帯、異様な熱気に包まれていた。

『なかなか良いデスヴォイスだ……だが、まだ甘い……
もっと激しく……唸れ、喚け、叫べ』

俺はそう言うのと演奏を続けた。

蠢く轟音

「さて、次は……」

俺は声を出さずに言い、グロテスクの左手を切断……

グロテスクは再び絶叫した。

切断された左手が俺のローブを掴み、許しを乞うが俺はその左手を外し

『汚ねえな』

と言い、グロテスクを的に投げ捨てた。

グロテスクは血飛沫で処刑を演出している。

俺の薄白い顔は、返り血で見る見る内に赤く染まってゆく。

そして、俺は間奏のギターソロで完全に自己陶醉していた。

その酔った勢いでグロテスクの両足を一度に切断……

グロテスクの胴体が地面に跳ねて転がる。

それを見ていたJOKERは、透かさず空高く舞い上がり、ギターから形を変えた大剣をグロテスクの胸に突き立て精神を断った。

グロテスクは嗚咽している。

俺は

『ラスト』

と叫び、群衆を煽ってから残された首を切断した。

曲が終わると共にグロテスクの断末魔が響いた……

辺りは血なまぐさい匂いが立ち込めていた。

俺は足元に転がった生首を掴み、それに顔を寄せ

『貴様の好きなデスメタルであの世に逝けて本望だろ？

俺に感謝しろよ……』

と嫌みたらしく言った。

そして、俺はその生首を高々と掲げた。

それを見た群衆は拳を天に突き上げ、歓喜の声を上げていた。

俺は後ろに生首を放り投げた。

トイレの屋根から一部始終を見ていた一羽の鴉は嬉しそうに鳴きながらグロテスクの残骸に飛び付いた。

その鳴き声に釣られて腹を空かせた鴉が一羽、また一羽と数を増やし群がっていった。

グロテスクの残骸は一瞬にして赤から黒に染まった。

無数の鴉は首を激しく振りながら新鮮な肉を我武者羅に啄んでいる。

血塗れになった俺に何人か近付いてきて

『お疲れ様です』

と声を掛け、冷たい飲み物とタオルを差し入れてくれた。

俺が無言のまま受け取ると、その内の一人が

『次のライブは、いつですか？』

と聞いてきたので

『未定だ……』

と俺は一言、答えた。

その後、すぐに音楽関係者と名乗る男が寄って来て、名刺を差し出しながら

『デビューしませんか？』

と言ってきたが勿論、俺は断った。

群衆達は今の光景の全てをライブパフォーマンスと思っている様だ。

そして俺はコスプレしている人間だと思われているのだろう。

群衆の方から何か聞こえてきた……

『アンコール』

群衆の一人が言う

『アンコール』

後に続けとばかりに数人が言っている。

『アンコール』

だんだんとその声は大きくなってゆく。

『アンコール』

群衆全員が心をつにして言っている。

俺はJOKERに眼で合図した。

その声に応え、古びた服の老人に捧げる鎮魂曲を奏でた。

……

……

……

演奏が終わると俺はJOKERに処刑を見ていた群衆全員の記憶の一部を消すように頼んだ。

JOKERは首を縦に一つ振り、流れる様な華麗な動きで群衆達の頭に大剣を入れ、今 行われた処刑の記憶を断った。

群衆達は一斉に倒れたが、すぐに起き上がり何食わぬ顔で散っていた。

振り返るとグロテスクの残骸は跡形も無く消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4757x/>

DEATH13

2011年11月15日00時29分発行